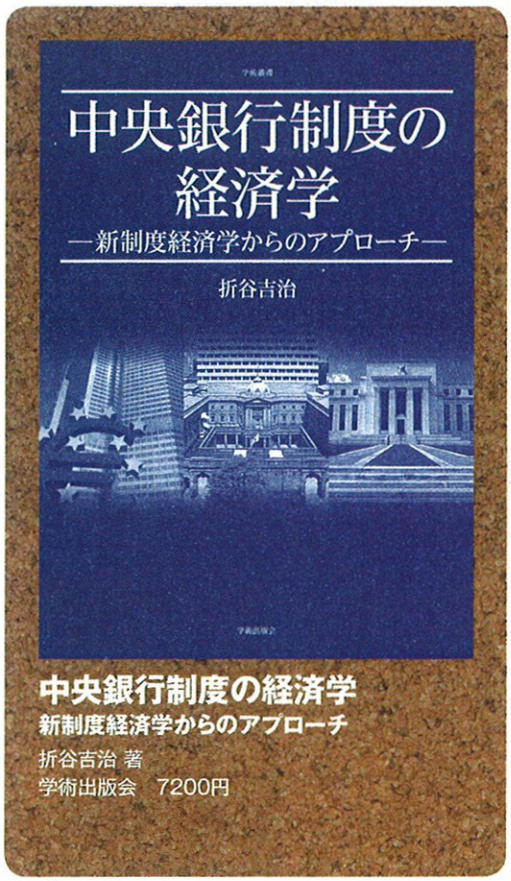
書林探索

# 本当に必要か、何を担うべきか 新しい経済学で問う「中央銀行」

選・評
北村行伸
一橋大学経済研究所教授




**中央銀行制度の経済学**
**新制度経済学からのアプローチ**
折谷吉治 著
学術出版会　7200円

本書は中央銀行制度をめぐる問題について、新制度経済学、組織の経済学、比較制度分析などの経済理論に基づいて検討を加えたものである。中央銀行について書かれた著作、金融政策について書かれた著作はたくさんあるが、中央銀行制度について、新制度経済学の立場から分析した研究は評者が知る限り本書が唯一のものであり、極めて重要な貢献である。

著者は長らく日本銀行に勤務し、中央銀行の機能と制度を内部から支えてきた。その経験に基づく問題意識は極めて明確であり、読者には、中央銀行員が何を考えて、その制度を運営しているのか、あるいは何に悩んでいるのかが本書を読むと伝わってくるだろう。

具体的な問題意識を紹介しておこう。まず、中央銀行は本当に必要なのだろうか。また、どのような機能が必要とされており、どのような機能は民間代替が可能だろうか、という問題がある。次いで、中央銀行のガバナンス構造はどうあるべきか、複数ボード制（政策委員会、経営委員会、監督委員会等）か単一ボード制かという問題についても熟議すべきであるにもかかわらず、新日銀法で単一ボード制が採用されて以来、ほとんど議論されていない。現金通貨供給機能は中央銀行が担うべきなのか、政府と分担すべきなのか、また民間機関で代替できないのかという問題もある。さらに、中央銀行が担う決済システムについても、システムの所有権やガバナンス機構のあり方など重要な検討課題であることが示されている。

これらの組織や制度の問題を新制度経済学で論じることの意義は、本書から十分に伝わってくるが、残された問題も明らかだ。すなわち、中央銀行制度は、決して静学的なものではなく、進化するものである。既存の制度に経済合理性があるということで止まるのではなく、複数制度間の均衡理論や制度の進化論のような新たな理論が必要だろう。また、それは学習し続ける組織としての中央銀行像とも密接に関連しており、中央銀行の組織のあり方にも関わる課題であることを指摘しておきたい。

## 新刊フラッシュ

**国債リスク**
森田長太郎 著
東洋経済新報社　1600円
住宅ローン金利や為替レートにも大きな影響を及ぼす国債市場。著者は日本国債の六つの将来シナリオを予測。国債がこれまでと違う新たな局面を迎えたわけを解説する。

**「主婦の気分」マーケティング**
大給近憲 著
商業界　1500円
「気分で買い物をする」「所帯じみたように見られたくない」といった〝普通の主婦〟の消費行動を実例と共に徹底分析。主婦の心理を理解した商品づくり、売り場づくりを考える。

**資産価値を守る！ 大災害に強い町、弱い町**
山崎 隆 著
朝日新書　760円
資産価値の高い不動産を選ぶには？多くの要因が絡む不動産の資産価値を自然災害リスクと賃料相場で分析。主要都市の住宅選びを解説する。

**バンカーズストーリー**
中島 久 著
近代セールス社　1000円
理屈通りにはいかない金融の最前線。金融機関で働くとはどういうことか、仕事のやりがいとは何か。融資の現場から、内部でのキャリア形成まで、地域金融機関の世界をリアルに描写する。

＊本の価格はすべて本体価格です。